

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

2017年2月8日
第6号
教育指導課教育課程係

児童生徒の多様な見方・考え方の育成を目指して

■ 仙台市立高砂小学校（授業研究） 講師：奈須 正裕 氏（上智大学教授）

1月31日（火）、仙台市立高砂小学校（佐々 孝 校長先生）を会場として授業研究会（公開授業）を行いました。当日は、上智大学の奈須^{なす}正裕^{まさひろ}教授が講師として来校され、指導助言と講話をいただきました。

授業研究は、5校時目に2年生全ての学級（3学級）で、国語の授業が行われました。「おもちゃ教室をひらこう」の単元の中で、本時では、おもちゃの作り方を相手に分かりやすく伝える説明の仕方について、三人一組（説明する役・聞きながら作る役・二人の様子を見てアドバイスする役）で、立場を入れ替えながら学習しました。子どもたちは、自分が考えたおもちゃを手に、説明する順番に気を付けたり、友達のアドバイスを聞いたりしながら、より分かりやすい説明の仕方について考えました。

授業検討会では、約80名の参加者が、1グループ6～7名に分かれて、学習の見通しの持たせ方、観点を提示しての話合い活動、生活科と関連付けた指導等について、意見交換を行いました。

奈須先生からは、次のような助言がありました。



公開授業の様子



授業検討会の様子

○ 国語科の指導で押さえておきたいこと

- ・音声言語の学習なのか、文字言語の学習なのかを指導者がしっかりと押さえる。
- ・クラス固有の文脈（場面設定）をつくることにより、子どもは主体的に話す。
 - ⇒ 生活科と国語を関連させることは、効果的な手立てである。
 - ⇒ 子ども自身が分かっていることを説明させるのであれば、説明原稿は不要。状況さえ整っていれば、子どもは自ら説明できる。活動に意味が発生するような状況を整えることが重要。
- ・生涯において「何に使うこと」なのかを押さえ、本当に必要な活動なのか、何に向けての活動なのかを精査する。
 - ⇒ 説明する力は、場面、相手、状況等によって異なる。

○ 「主体的・対話的で深い学び」の視点から

- ・アクティブ・ラーニングは、活動レベルの話で終わってはならない。どのような資質・能力を身に付けさせるのが大切である。
- ・主体的とは、自分にとって意味のある学びであるべき。教師の都合で頑張る子どもではない。
- ・対話的な学びは、「思想との対話」、「先哲との対話」、「自分自身との対話」など、広く捉える。

平成28年度 アクティブ・ラーニング普及支援事業について

仙台市教育委員会では、今年度から、市内小・中学校の「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を推進するため、各行政区に1～2校の「拠点校」を設けております。各拠点校は、授業研究や校内研修の公開等を通じて、自校の成果や知見を他校へ提供するなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善に積極的に取り組んでいただきました。

【平成28～29年度の拠点校7校】

【小学校】 ・広瀬小（青葉区） ・六郷小（若林区） ・高砂小（宮城野区）

【中学校】 ・五橋中（青葉区） ・八木山中（太白区） ・加茂中（泉区） ・南光台中（泉区）

■ **多くの先生方が参加されました** 各拠点校においては、有識者等を指導助言者として招き、今年度は全部で8回の授業研究会と7回の研修会を行いました。授業研究会や研修会に参加された先生方の総数は「のべ647名」にのぼりました。平成29年度は、全拠点校で授業研究会や研修会を全市の先生方に対して公開する予定です。

■ **有識者の方々の講話を振り返ります** 有識者の方々が、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に関連して話された内容を以下にまとめました。

<p>宇治橋 祐之 主任研究員 (NHK放送文化研究所)</p>	<p>○ 道徳的実践力を高めるために道徳番組を活用する場合、授業の流れを想定する。</p> <table border="1" data-bbox="536 987 1358 1196"> <thead> <tr> <th>活用場面</th> <th>活用の目的</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>導入で使用</td> <td>関心・意欲・態度を高める</td> </tr> <tr> <td>展開で使用</td> <td>思考・判断を揺さぶる</td> </tr> <tr> <td>まとめで使用</td> <td>知識の定着を図る</td> </tr> </tbody> </table>	活用場面	活用の目的	導入で使用	関心・意欲・態度を高める	展開で使用	思考・判断を揺さぶる	まとめで使用	知識の定着を図る
活用場面	活用の目的								
導入で使用	関心・意欲・態度を高める								
展開で使用	思考・判断を揺さぶる								
まとめで使用	知識の定着を図る								
<p>鹿毛 雅治 教授 (慶應義塾大学)</p>	<p>○ 主体的な学びとは「没頭」と「思慮深さ」⇒ 子どもたちの思考が活性化するような教材研究が必要。主体的な学びは「集中・熱中・夢中」の中にある。</p> <p>○ 「没頭」と「思慮深さ」の心理学（感性と悟性）⇒ 感性とは総合的に感知される体験で培われる。体験したことを振り返り言語化することで、悟性（理解）が深まる。</p> <p>○ 「学ぶ力」を育むために⇒ 振り返ることを繰り返す指導することで思慮深さが身に付き、物事を見通す力も育っていく。このことが、学びの本質へと結び付いていく。</p>								
<p>森本 康彦 准教授 (東京学芸大学)</p>	<p>○ 学習の主役は子どもであり、子どもが主体的に取り組めるような授業を工夫する。</p> <p>○ 知識は与えられるものではなく、自ら構成するものであって、活用することによって定着する。</p> <p>○ 学んだことを個人、ペア（グループ）、全体で振り返ることが重要であり、振り返ることによって、学びを深め、次の学びにつながる。</p>								
<p>黒上 晴夫 教授 (関西大学)</p>	<p>○ 道徳における見方・考え方を身に付けさせるに当たり、多面的・多角的に考え、主体的に実行する子どもの育成を目指すことが大切。</p> <p>【多面的・多角的に考える】 ⇒ 子ども一人一人が、適切な行為を主体的に選択し、行動すること。</p> <p>【道徳的価値（道徳の中核）】 ⇒ 自分と関係付けながら広い視野で考えること。</p>								